

木版挿絵本のインパクト —1900年パリ万博に出品された「寺子屋」—

大塚 奈奈絵
日本大学大学院総合社会情報研究科

Japanese Woodblock Illustrated Books in the Paris Universal Exposition of 1900:

—The Cultural Impact of *L'école de village: Terakoya* and Other Books in Europe—

OTSUKA Nanae
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Takejiro Hasegawa, a successful publisher, produced and published the Japanese Fairy Tale Series in crepe paper and *L'école de village: Terakoya* to exhibit in the Paris Universal Exposition of 1900. They were well received and won a gold medal. The illustrations in the latter not only introduced the high level and quality of Japanese woodprints but also introduced the *Kabuki* theater to Europe visually. In this essay, I would like to examine closely the strong impression and the significant impact those books made and how they contributed to the movement of *Japonism* in art and dramaturgy in the following years.

1.はじめに

鎖国下の江戸時代、日本では木版製版による和装本が生まれ、学術書から草双紙まで様々な出版が行われて和本の文化の成熟をみた。また、木版製版の挿絵本から独立した浮世絵は庶民に愛されて多くの作品が生まれた。

明治に入ると、文字と絵を同一の版面で作成できる木版製版に替わり、銅版や石版、活版等の西欧の印刷技術が流入し、紙は和紙から両面印刷のできる洋紙に、本は和装本から洋装本へと変わった。同時に、欧米の技術の摂取を図る明治政府によって、多くの翻訳が行われた。この傾向は文学文化分野でも同様で、多くの翻訳書が刊行されたが、明治の半ばになると日本の文化を海外に発信する国際出版が試みられた。日本で最初の国際出版は、長谷川武次郎による「ちりめん本」と呼ばれる木版挿絵入りの欧文の和装本『日本昔話シリーズ』で、木版製版の美しい小型本はヨーロッパのジャポニスムと合間って、非常に好評で迎えられた。

本稿では、「ちりめん本」で著名な長谷川武次郎が、

1900年の第5回パリ万博に出展した書籍 *Scènes du théâtre japonais: L'école de village: Terakoya: drame historique en un acte* を取り上げ、日本の出版とヨーロッパ演劇の出会い、そして木版の挿絵が果たした役割について論じる。

2.長谷川武次郎の国際出版

2世紀以上にわたる鎖国の後に西洋文明に触れた日本は、「文明開化」の合言葉の下、外国文化の摂取を図ったが、その一方で、日本に滞在した欧米人によって、浮世絵や工芸品が高く評価され、海外へと流出した。同時に、日本を紹介する欧文のガイドブックや写真集、みやげ物としての木版刷りの挿絵本等が出版された。

羽生紀子は、「明治期日本出版と出版離陸、その後—翻訳・輸入と海外出版市場」の中で、海外出版者と提携した最初の例を、明治18年(1885)の長谷川武次郎の長谷川弘文社のちりめん本『日本昔話シリーズ』であるとしている。(1-12)

英語に秀で、貿易業を営んでいた長谷川武次郎は、

明治16年(1883)頃から日本の昔話を木版刷りの絵本にして英文の説明を加えて出版し始めたが売り上げは芳しくなかったという。そのうちに「不図縮紙でしたらばと思いついて」(長谷川 26-30)作り出したちりめん本は、海外で評判をよんで歓迎され、英語版の他、フランス語版、ドイツ語版、オランダ語版の他、大正年間以降にはスペイン語版、ポルトガル語版、ロシア語版、デンマーク語版も出版された。

「ちりめん本」は、木版多色刷りで挿絵を印刷し、さらに文字を印刷した和紙を圧縮してちりめん状に加工して仕立てた和装本で、柔らかく、ちりめんの布に似た風合いの手触りから「ちりめん本」、英語圏ではクレープ・ペーパー・ブックと呼ばれた。ちりめん仕立てに和紙を加工することは、寛政(1789～1801)前後から大正頃まで流行し、一枚摺り版画や和装アクセサリ、千代紙等が作られていた。日本の浮世絵は印象派の画家達に大きな影響を与えたとされるが、ゴッホが『タンギーじいさん』の背景に描いた浮世絵の一枚が、ちりめん紙に摺られた一枚物のちりめん絵であることが最近判明している。また、浮世絵がちりめん紙に加工され、綴じられた状態で本として販売された物もわずかであるが確認されている。

その一方で、上質の和紙をちりめん紙に加工し、欧文の本を作ることは長谷川武次郎の独自の工夫であった。長谷川弘文社のちりめん本は、バジル・ホール・チェンバレンやジェームズ・ヘボン、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)等が翻訳者に名を連ね、また、挿絵も小林永濯や鈴木華邨ら日本画家による芸術性の高いものであり、彫りや摺りも技術的に優れたものであったことから、現在でも児童書として高く評価されて、国内では研究書や書誌類が多数刊行されている他、海外でも解説や所蔵カタログが出版されている。¹

長谷川弘文社は、ちりめん本を自身の店舗の他、丸善やガゼット新聞社(Japan Gazette)の横浜売捌店などで販売するとともに、横浜の他、香港、上海、シンガポールに支社を持つ、ケリー&ウォルシュ社(Kelly & Wash)を通じて輸出・販売した。また、ロンドンのグリフィス・フェアラン社(Griffith, Farran & Co.)と販売契約を結び、ちりめん本『日本

昔噺シリーズ』の英語版を共同出版し、ロンドンとシドニーで販売した。(ヘリング 12-14)

ちりめん本はジャポニスムの波にのって、好調な売行きを見せ、長谷川弘文社は、明治20年代には、日本の生活を描写した様々な内容のちりめん本や小冊子形式のカレンダーなども作成するようになった。さらに、『日本昔噺シリーズ』のドイツ語版の翻訳者であったカール・フローレンツ(Karl Florenz)の仲介によって、ライプチヒのアーメンラング社(C. F. Amenlag)とも契約し、カール・フローレンツが翻訳した日本文学書のちりめん本を次々に出版し、好評を得た。²

長谷川武次郎の弘文社の出版した本には、初期に造られた国内向けの木版白黒の挿絵で平紙の茶色表紙本と、木版多色刷りの挿絵入りちりめん本等の種類があり、また、後に刊行された高価な奉書紙を用いた、木版多色刷り挿絵の豪華な平紙本等もあったが、ちりめん本の名称が高名であるため、現在では、これらの欧文の木版挿絵本すべてがちりめん本と総称されている。なお、長谷川武次郎以外が出版したちりめん本としては、フランス人ピエール・バルブトー(Pierre Barboutau)が日本の絵師に描かせた美しい『ラ・フォンティーン寓話選』などが残されている。

3. パリ万博への出品

明治27～28年(1894～95)の日清戦争は、近代日本の最初の戦争であるとともに、写真文化に凌駕される直前の木版文化が、戦争報道に花開いた最後の機会となった。江戸時代に美人画や役者絵、風景画を中心に発達した浮世絵は、元々が、「浮世」を写し出し伝達する媒体としての性格を持ち、江戸の庶民は浮世絵によって様々な社会情報を得ていた。社会が変動した幕末には、浮世絵も時事を写し出す性格を強め、幕末の動乱や西南戦争を描いた戦争画が非常に人気を博した。日清戦争の際には、写真を新聞報道に使う技術が十分ではなかったため、従軍写真士4名に対して、11人の画工が従軍したといわれる。(参謀本部 140-41) これらの従軍画工が描いた戦争絵や、それを参考に内地の絵師達が描いた数百枚にのぼる錦絵や石版画が売り出され、錦絵界は大好況を呈したと言われている。(原田 1-16) だが、Sharf

によれば、この時代、長谷川武次郎は、戦争画として6枚組の木版画1組を制作したのみで、国内に市場を拡大することはしなかった。(22)

日清戦争後の明治29年(1896)、長谷川弘文社は、フローレンツ翻訳の和歌と俳句の翻訳集 *Bunte Blätter: japanischer Poesie* を、ちりめん本ではなく、錦絵の和紙として欧米で高い評価を得ていた高価な奉書紙を用いた木版多色刷りで出版した。この本も、長谷川弘文社印刷・アーメラング社発行として刊行され、ヨーロッパで好評を得た。

Sharf は、この頃から、長谷川武次郎は、1900年のパリ万国博覧会に向けてフランス語の出版物の準備を始めたと述べ、*Images japonaises* と *L'école de village: Terakoya: drame historique en un acte* の2点のフランス語の挿絵本を挙げている。これらはいずれも *Bunte Blätter: japanischer Poesie* と同様に奉書紙を使用した、21×28センチの大型本であった。

Images japonaises は、明治29年(1896)にベンジャミン・チャペル (Benjamin Chappell) が英詩をつけ、*Glimpses of Japan* のタイトルで出版した鈴木華郵の版画集をベルギーの詩人エミール・ヴェルハーレン (Emile Verhaeren) に送り、詩作を依頼して作成したフランス語版で、英語版と同様に、明治29年(1896)に出版された。日本と詩人ヴェルハーレンの「最初の接触」³と評され、日本美術愛好家の間では稀覯本とされている。

L'école de village: Terakoya: drame historique en un acte は、表紙等を除くと23丁程(46ページ)の袋綴じ(四つ目綴じ)の和装本で明治33年(1900)1月に出版された。3ページの序文に続いて、劇場の幕が開く様子と美しい花々に彩られた「寺子屋」の題字をはさんで、カール・フローレンツが竹田出雲の『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋」の段をフランス語に翻訳した31ページの本文があり、⁴ その後にはページ付けを変えた9ページの歌舞伎の紹介がある。佐藤マサ子によれば、フローレンツは、明治32年(1899)5月に歌舞伎「寺子屋」の翻訳を東京の会合で朗読し、好評を得たとされているので、フローレンツは「寺子屋」をまずドイツ語に翻訳し、その後、フランス語に翻訳したものと推察される。

フランス語版「寺子屋」は、表紙は板紙で金の題

字、銀色の流水模様に「寺子屋」の主人公の松王を象徴する松を配した図柄で、書袋には、幕間の芝居小屋の客席を描いた美しい絵が使われている豪華本であった。挿絵を描いた新井(歌川)芳宗(1863～1941)は、歌川国芳の門下で彩色に優れ、師の色差しをしていた初代歌川芳宗の末子で、本名は新井周次郎、初名は年雪、一松齋とも号した。周次郎は、明治8年(1877)に父と同門の月岡芳年の門人となり、父の死去後の明治14年(1881)に歌川芳宗を襲名した。錦絵の他、新聞や雑誌などの挿絵を多く書いたが、明治18年(1885)の『東京流行細見紀』では、「錦 浮世屋絵四朗」の項で、一番目の月岡芳年、二番目の小林永濯から八番目の新井芳宗までが、「日の出 新流行 大上ゝ吉 大ゝ叶」に位置づけられており、この当時、ある程度認められた絵師であったものと考えられる。長谷川武次郎との仕事は、明治29年(1896)の *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* が最初であったが、以後、長谷川の挿絵を多く描き、長谷川武次郎の唯一の著者である *Japanese Pictures of Japanese Life* の挿絵も描いて、石澤小夜子は、「武次郎が特別珍重していたと思う」と述べている。(242)

さらに、カール・フロレンツは、明治33年(1900)9月にドイツ語版のちりめん本 *Japanische Dramen; Terakoya und Asagao* を出版し、同様にこのドイツ語版もパリ万博に出品された。この本は、竹田出雲の浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋」の段と、山田案山子『生写朝顔話』の「宿屋」の段のドイツ語訳で、それぞれの本文の前には作品についての解説が附され、「寺子屋」と「朝顔」は別のページ立てとなっている。フランス語版に附されていた劇場や歌舞伎についての解説はなく、ちりめん加工により、フランス語版よりも一回り小さい(約15×19cm)大和綴じの本で、挿絵はフランス語版と同じ新井芳宗のものである。この本は、ドイツで好評を得て長く翻案、上演され、また、広く各国語に翻訳されて、オペラも2作品作曲されて、現在に至るも上演され続けていることが知られている。⁵

なお、長谷川武次郎は、明治32年(1899)に同様に新井芳宗の挿絵のちりめん本で、日本の寄席の様子を紹介したジュール・アダン(Jules Adam)によるフラ

ンス語版 *Au Japon: Les Raconteurs Publics* と、オスマン・エドワーズ(Osman Edwards)による英訳 *Japanese Story-Tellers* を出版していて、石澤小枝子は、「この本は、仏訳も英訳も 1900 年のパリ万博に出品されているはずである」(186) と述べている。

長谷川武次郎は、これらの書籍類を 1900 年のパリ万国博覧会第 3 部第 13 類に出品し、金牌(賞)を受賞した。(東京国立文化財研究所 321, 357, 413) そして、以後も 1904 年のセントルイス万博、1905 年のポートランドおよびリエージュ万博など多くの国際博覧会で受賞を重ねることになる。

4.1900 年パリ万博

第 5 回パリ万国博覧会 Exposition Universelle は、1900 年 4 月 15 日から 11 月 12 日まで開催され、総入場者が 5,000 万人以上にのぼる 19 世紀最大の万国博覧会であった。会場は、パリのシャン・ド・マルス、トロカデロ、アンヴァリッド、シャンゼリゼ、セーヌ川兩岸の広い範囲におよび、1889 年までの万国博覧会の会場に加えて、シャンゼリゼにはグラン・パレとプチ・パレが建設され、セーヌ川の兩岸はアレクサンドル 3 世橋によって結ばれた。メトロや動く歩道、電気の照明技術等の最新の産業技術による様々な展示物が出品されたが、この万博で最も評価の高かったのは、グラン・パレとプチ・パレの美術展であり、「芸術の都パリ」「流行の都パリ」の評価が高まることとなった。フランス政府は、美術のみならずファッションや宝飾品、家具等の分野の出展作品にも重点を置き、これが後のアール・ヌーヴォーの流行につながったとされている。

この万博での出展作品の分類は、18 分野、121 部門からなり、参加国は 40 を超えた。出展作品は、国別ではなく部門別に展示されたが、セーヌ左岸には各国のパヴィリオン群があり、トロカデロにはフランス植民地とロシア、中国、日本のパヴィリオン群があった。ナショナリズムの高揚を背景に、各国は万博を自国のイメージを強調する場として展示を行った。日本のパヴィリオンは、法隆寺の金堂を模した建物で、中には古美術品が飾られた。日本から渡仏した芸者が交替で陳列されて大きな評判となり、最初は観客との交流が禁じられたため、フランス側

から人権問題だという非難が起きて、交流が許可されたという記述まで残っている。(木村 173) さらに、この万国博覧会の会場では、1899 年から約 3 年間にわたり欧州を巡業していた川上音二郎と貞奴の公演も行われて人気をよんだ。この時の演し物は『人肉質入裁判』、『討入曾我』、『左甚五郎』、『児島高德』、『芸妓と武士』であったとされている。(芳賀 320-21) この時の公演の録音は『甦るオッペケペー～1900 年パリ万博の川上一座』として CD で販売されている。

『千九百年巴里万国博覧会出品連合協会報告』によれば、長谷川武次郎のものと思われる出品記録が、第 1 部及び第 3 部(教育及ヒ文学科学並ニ芸術用ノ機具及ヒ製法)に残されている。この分野には、標本類、木版書類、写真類、書籍印刷物、衡桿類其他、楽器類及付属品の部門があり、書籍印刷物の部門に、真美大観の京都仏教真美協会等と並んで「(仏文書籍) 東京 長谷川武七郎」という記述があるが、「長谷川武七郎」は「長谷川武次郎」の誤植であると思われる。この報告書の付録には「各府県出品売卸金 人別表」があり、ここでは「東京 長谷川武次郎」として、102 フラン 25 サンチウムの売上げが記入されている。(160 附 346)

5.Terakoya とその反響

フローレンツの *Japanische Dramen; Terakoya und Asagao* 及び *L'école de village: Terakoya: drame historique en un acte* については、1901 年に刊行された *T'oung Pao* という雑誌の 2 巻 2 号の *Bulletin Critique* 欄に G. Schlegel によるフランス語の書評が掲載されており、当時の反響をうかがい知ることができる。書評タイトルは *Japanische Dramen: Terakoya und Asago, ubertragen von Prof. Dr Karl Florenz. Leipzig, C. A. Amelang, Tokyo, T. Hasegawa. 1891* (表記は原文のまま) とあり、フローレンツによるドイツ語版について、日本の紙に印刷された挿絵入りの美しい本で、「寺子屋」と「朝顔」のドイツ語訳であると説明している。興味深いのは、「朝顔」については、ロマンティック・コメディであること、「朝顔」が安芸の国の前の家老の娘の名であること等の説明がされている一方、脚本としての「寺子屋」については

全く言及がないことである。

続いて、評者は、フローレンツ博士が、「寺子屋」のフランス語訳に *Scènes du théâtre japonais* とタイトルを増補した、日本のアートを使用した豪華な挿絵本も出版したことを述べている。そして、この本によって、電球の光に彩られた日本の劇場や楽屋の様子を学ぶことができると述べている。さらに、日本の劇場には2つの花道があり、役者たちがこの花道から登場することなどを丁寧に説明していて、挿絵で示された花道が非常に印象深かったことが推察される。最後に評者は、この美しい挿絵本の10フランという価格の安さに驚きを示し、ヨーロッパでこれだけの本を出版すると挿絵なしでも50フランはするだろうと書いている。

G. Schlegel が書評の中で強調したフランス語版の歌舞伎の説明は、まず最初に“L'acteur dans sa loge”と題して、楽屋で浴衣のもろ肌を脱いで鏡の前で化粧する役者の様子が描かれた挿絵で始まっている。この役者は、浴衣の模様から団十郎であることが推察できる。次のページは“La scène”と題した説明文で、東京の歌舞伎座の舞台と花道が描かれた挿絵が見開きに配置されている。次ページからは、黒子や大薩摩、ちょぼ、つけ打ち、お囃子、舞台裏、回り舞台を回す様子などが説明文に挿絵を添えて紹介され、最後のページは、五つ紋の正装に勲章をつけた名優団十郎の肖像とその紹介で終わっている。やや唐突に登場する最初のページの化粧をする団十郎と、最後のページの正装の団十郎は、歌舞伎を代表する名優の姿として、対に描かれたと理解することもできる。

この歌舞伎の説明の原文が誰の手によるものかは定かではないが、説明文の内容はもとより、木版多色刷りの挿絵の数々は、日本の歌舞伎の美しさをヨーロッパの人々に印象付けるために入念に選び出されているように思われる。

6.おわりに

19世紀後半以降、日本美術は西欧の美術や文化に大きな影響を与えた。この影響は現在ではジャポニスムと呼ばれている。ただし、ジャポニスムという用語がフランスで一般的に通用するようになったの

は、第二次世界大戦後で、それ以前はジャポネズリー（日本趣味）が使われていた。馬淵明子『ジャポニスム—幻想の日本』によれば、ジャポネズリーは「日本的なモチーフを作品に取り込むが、それが文物風俗へのエキゾチックな関心にとどまっている」のに対して、ジャポニスムは「日本美術からヒントを得て造形のさまざまなレベルにおいて、新しい視覚表現を追求したものである」とされている。ただし、ジャポネズリーという用語は、現在ではあまり使われなくなり、ジャポニスムという用語が、ジャポネズリーを含む広い意味で使用されるようになってきている。

ジャポニスムは、1860年頃に始まって絵画や彫刻をはじめとする美術のすべての分野から、演劇、音楽、文学などの広い範囲におよび、1910～20年の間に終焉したと言われ、長谷川武次郎のちりめん本や木版挿絵本の出版と販売もジャポニスムを背景としたものであったと考えられる。

日本の浮世絵はゴッホをはじめとするフランスの印象派の画家達に色彩や構図の面で大きな影響を与え、さらに、本稿で取り上げた1900年パリ万博以降に流行したアール・ヌーヴォーの工芸作品には、日本の浮世絵の影響が大きかったことも広く知られている。

一方、歌舞伎を西洋に伝えた文学としては1885年（明治18年）秋に京都で歌舞伎を鑑賞した「十九世紀最大のエグゾチスム作家」ピエール・ロティ（Pierre Loti）の『秋の日本』が有名であり、その中では、芝居小屋の外観や、棧敷の上流社会の人々と土間の庶民の様子、伴奏席の銅鑼や拍子木、三味線、横笛などの楽器、回り舞台、奈落や楽屋での役者等舞台裏の様子が、異国情緒をかきたてる筆致で詳細に記述されている。同様にフランス語版 *Terakoya* でも、ロティの説明と類似する劇場の様子が新井芳宗の端正な筆使いと上品な色彩の挿絵によって克明に描かれ、ヨーロッパの人々に歌舞伎座の舞台の正確な情報を伝えると同時に、日本のエキゾチックな魅力を伝える役割を果たしていた。

挿絵の持つ役割には、「百聞は一見にしかず」の言葉の通り、説明する文章の理解を容易くする役割とともに、文章と一体となって一つの世界を作り出し、

情緒を伝える役割を持っている。例えば、見返しにあしらわれた夜の歌舞伎座の絵は、長谷川の絵師が得意としたといわれる摺りぼかしによって、夜の芝居小屋の、光にあふれた独特な美しさを描き出している。また、書袋に使われた芝居の始まりを待つ客席の絵からは、様々な階級の人々の期待に満ちた楽しい雰囲気伝わってくるようである。適切に選ばれた挿絵の数々が、現代のカラー写真にも勝る魅力を生んでいることは、この本を見れば明らかであろう。

フランスにはもともと多くの挿絵入り『ラ・フォンテーヌ寓話選』を生んだ挿絵文学の伝統があり、また、「ルリユール」(製本工芸、書物工芸)の長い伝統があった。さらに、1900年以降には、当時の画商たちによって画家の手になるオリジナル版画を入れた限定版の詩集や小説等の豪華本が相次いで出版されるようになる。美術工芸の概念が確立しつつあったこの時代、日本の和本の技を集めた長谷川のフランス語版「寺子屋」は、歌舞伎という異文化の芝居の珍しさと、装丁や挿絵のエキゾチックな美しさで、フランスの愛書家達を魅了したものと思われる。

<参考文献>

- アン・ヘリング「続・縮緬本雑考(1)」『日本古書通信』461号(1982年9月) pp. 12-14.
- 石澤小枝子『ちりめん本のすべて』三弥井書店 2004年
- 大場恒明「エミール・ヴェルハーレンの Images Japonaises をめぐって」『神奈川大学国際経営論集』16/17号(1999年3月)
- 木村毅『海外に活躍した明治の女性』至文堂 1963年
- 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社 1995年
- 参謀本部編『明治二十七八年日清戦史 第八巻』東京印刷 1907年
- 『千九百年巴里万国博覧会出品連合協会報告』巴里万国博覧会出品連合協会残務取扱所 1903年
- 高山晶『ピエール・バルブトー 知られざるオリエンタリスト』慶応義塾大学出版会 2008年
- 東京国立文化財研究所編『明治期万国博覧会美術品出

- 品目録』中央公論美術出版 1997年
- 芳賀徹他編『講座比較文学第3巻近代日本の思想と芸術 I』東京大学出版会 1973年
- 長谷川武次郎「木版畫の輸出」『美術新報』13(3)(大正3年1月) pp. 26-30.
- 羽生紀子「明治期日本出版と出版離陸、その後—翻訳・輸入と海外出版市場」『鳴尾説林』9号(2001年11月) pp. 1-12.
- 原田敬一「戦争を伝えた人びと—日清戦争と錦絵をめぐって—」『仏教大学文学部論集』84号(2000年3月) pp. 1-16.
- 平野繁臣『国際博覧会歴史事典』内山工房 1919年
- 村松定史「異文化交流のひとつま: ヴェルハーレンと縮緬本」『東京成徳大学研究紀要』8号(2001年6月) pp. 41-54.
- 吉田光那『図説万国博覧会史 1851-1942』思文閣 1985年

Riccardo Franci. Takejiro Hasegawa e le fiabe giapponesi del Museo Stibbert = and the Japanese fairy tales of the Stibbert Museum and the Japanese fairy tales of the Stibbert Museum. Sillabe, 2008.

Schlegel, G. [Review of] Japanische Dramen: Terakoya und Asagao. *T'oung Pao*. 2(2) 1901 pp. 151-52. . (Stable URL: <http://www.jstor.org/stable/4525529>)

Sharf, Frederic. A. *Takejiro Hasegawa: Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-block-illustrated Crepe-paper Books*. Peabody Essex Museum, 1994 10.

¹ 代表的なものとして、石澤小枝子『ちりめん本のすべて』三弥井書店 2004年があり、本稿の長谷川武次郎の生い立ち等についての記述はこれによっている。海外で、出版された解説類には、Sharf, Frederic A. *Takejiro Hasegawa: Meiji Japan's preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books*. Peabody Essex Museum, 1994 10. および Riccardo Franci. *Takejiro Hasegawa e le fiabe giapponesi del Museo Stibbert = and the Japanese fairy tales of the Stibbert Museum*. Sillabe, 2008.がある。

² フローレンツの生涯と業績については、佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社 1995年を参照した。

³ 大場恒明「エミール・ヴェルハーレンの *Images Japonaises* をめぐって」『神奈川大学国際経営論集』16/17号(1999年3月)。なお、村松 定史「異文化交流のひとこま：ヴェルハーレンと縮緬本」『東京成徳大学研究紀要』8号(2001年6月) pp.41～54には、資料全体の写真と原文および日本語訳が掲載されている。

⁴ 石澤小枝子、前掲書、p.173には、「Jules Adam(ジュール・アダン)の *Scènes du théâtre japonais* と題する仏訳」とあるが、*Scènes du théâtre japonais* の奥付には、「翻譯者 文學博士 カール、フロレンツ」とある。

⁵ Carl Orff. *GISEI - DAS OPFER (Musikdrama op. 20)*
Dichtung von Carl Orff frei nach TERAKOYA [Die Dorfschule] von Takeda Izumo [u. a.] in der Übertragung von Karl Florenz. および Weingartner, Felix von. Die Dorfschule: Oper in einem Akt nach dem altjapanischen Drama "Terakoya".

(Received:May 31,2013)

(Issued in internet Edition:July 1,2013)